

特集:パワーアップ加東

加東のパワーの源を探ろう

諦めることなく、練習を

大会直前。厳しい練習の成果が発揮され、動作に無駄がなくなつたように感じ、川田指揮者に尋ねると、「確かにタイムも六十秒をきれるようになってきたんです」という頼もしい言葉が、「目指せ五十五秒」と書かれた看板が、現実のものとなりつつありました。

隊員のみなさんを見ると、それまで見せていた笑顔が、川田指揮者の一声で凛とした表情に変わり、号令と共に勢いよく操法が始まりました。一度通して練習し、納得のいかない部分は市の消防隊員から指導を受け、思うように動けるまで練習を続け、そしてまた通して練習するという徹底ぶりでした。

また、彼女達の練習を手伝うために市内の消防団が日替わりで練習に立ち会い、それぞれの部分でアドバイスを行っていました。

このように毎回遅くまで続く練習に、みなさんの家族の反応はどうだったのでしょうか。

Q 女性消防隊に出ると話したとき、家族の反応はどうでしたか。



3番員 大原 舞子さん

「自分でやると決めたなら、最後までがんばりよ!」と、応援してくれました。

このように家族に励まされた隊員は多かったようで、家族の応援が支えとなっていたようです。



家族も練習の応援に

女性から見た消防活動

家族やみなさんに支えられ、およそ五か月に及んだ厳しい練習を乗り越え、十月二十五日、加東市女性消防隊のみなさんは横浜市での全国大会に臨みました。

残念ながら上位入賞は叶いませんでしたが、今回の活動を通して、「消防活動」に対する見方が変化したそうです。

Q 大会を終えて、消防や防災に対する考え方が変わったそうですか。



4番員 芝本 めぐみさん

火は燃えるのが早く、時間との闘いになります。それはとても大変なことだとわかり、防火意識が高まりました。



吸管補助員 岸本 千鶴さん

練習を始めてから、消防のサイレンの音に敏感になりました。また、これからの高齢化社会に女性消防の力が加わってもいいのでは...と思うようになりました。

この他にも、「男性だけでなく、女性も『もしも』のときに備えて訓練や講習などを受ける必要があるのかな」と思いました。と女性の防火活動に積極的な意見があったり、「救急車の音に敏感になり、人命救助について即行動しなければ」と責任感が出てきました。と、消火活動だけでなく、救命の分野にも意識が向くようになったという意見もありました。

隊員のみなさんは、今回の活動を通し、改めて「防火・防災」について「男性だけでなく、女性でもできることがある」と感じられたようです。

また、「形だけの競技だと思っていた『操法競技大会』が、消火活動に当たるときには、大いに生かされるのだということも理解できた」とのこと。

普段なかなかできない「女性消防操法」という経験が、彼女達に改めて本当の防災について一石を投じたように思えました。

新しい挑戦へ

今回の活動を通して、防災意識が高まった女性消防隊のみなさん。

今後の具体的な活動は未定とのことですが、加東市消防本部の岸本警防課長は、「みなさんにはこの経験を生かして、今後消防火警報や火災予防のキャンペーンなどに携わっていただき、活躍の場を広げていただきたいと考えています。」と話し、合わせて「全国的に男性の消防団員が減ってきており、加東市でも例外ではありませんので、女性消防団員を増やして、初期消火をしていただけるようになると、地域の防災力が上がって、大変ありがたい」と話していました。

